
調査室

あやひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
調査室

【コード】
N0872B

【作者名】
あやひこ

【あらすじ】
調査室にて取り調べを受ける人々のストーリー

第1話 英雄

「俺はその日風邪で寝てました。」

広さ三乗ほどの薄暗い部屋でその声はこだまする。

「それを証明できますか？」

その声もまたこの部屋にこだまする。

ふと部屋の小窓に目をやると雨が降っているようで雨粒が次から次へとガラスへ流れ落ちている。

思えば朝家を出る時天気予報は曇りと伝えていた。しかし服部は傘を持たず家を出た。お天気キャスターの池上佑子が「傘を持つ必要はないでしょう。」と言っていたのを信用したからだ。

服部は今19歳の青年と一つ机を挟んで向かい合いパイプ椅子に座っている。

青年の言葉を鵜呑みにして信用してやりたい。しかし鵜呑みにするにはまだ早い。確実な証拠がほしいのだ。

青年の名は宮田壱哉。有名私立大学に通う一年生だ。今宮田は婦女暴行の容疑で服部に取り調べを受けている。

平成18年5月26日

ピロピロピロローピロピロロー

宮田のケータイが鳴る。

「はい、」

「宮田か？今日サークルに顔出せよ、おもしれーのみれんぜ。じゃーな。」

ピッ。

宮田は大学に入りまず友達作りにサークルに入る事にした。

大学に入る為勉強づくめで高校生活を過ごしてきた宮田はなんの取り柄もなくプラプラ校内をさまよいこれといって入りたいサークルを見つけられずにいた。ふと掲示板に目をやると“男子美化サークル”という貼り紙が目についた。活動内容は自分磨き。宮田は今の自分にぴったりだと思った。今流行のイケメンとは程遠い自分。自分を変えてみたいそんな思いでサークルに入った。

そのサークルで今の携帯の相手八木と出会う。八木は宮田の二つ上の三年生でサークル内では幹部クラスの存在だった。宮田は八木につき自分を変えていった。流行の髪に流行の服、女子と接する際のマナーなど細部にわたり指導してもらった。今では校内でもイケメンの部類に宮田の名が上がる程だ。

そんなわけでサークルとは疎遠で女の子との遊びに日々過ごしていたが八木に来いと言われれば行くしかないそんな舎弟関係がすでに成り上がっていた。

「チーッス。」

戸を開けると正面には“目指せイケメン！”の貼り紙がある。その貼り紙には名前が書かれておりこのサークルから排出されたイケメンは皆ここに名前を記入する仕組みになっている。だがまだ宮田の名前はない。最終試験に合格しないとこの貼り紙に名前は書いてはいけないらしく宮田自身にも最終試験がなんなのか一切知らされていなかった。

「おう宮田久しぶり。最近やりまくってるっー噂じゃん。」

「はあ、、」

「おまえに最終試験受けてもらおうと思って。」
「やった！宮田は内心嬉しかった。これで俺も一人前だ。これで俺の名前もあの貼り紙に記憶される。俺も英雄になれる。」

「んで最終試験っーのはな、、。」

翌日宮田は校内のカフェで一人コーヒを飲む女子を見つめていた。別に好きなわけじゃない。これが最終試験なのだ。

『俺らの指定する女子とこの部屋でキスする事。それが出来たらここにおまえの名前が刻まれる。』

なんなく宮田はその女子を部屋に連れ込みキスする事が出来た。

その途端、どこからか八木や他の幹部が現れ部屋に鍵を掛け女子をはがいじめにし泣き叫ぼうものなら暴力をふるい服を脱がしやりたいたい放題にもて遊んでいる。顔いっぱい涙をため震える彼女をただ漠然と見る事しか出来なかった。長く長く感じられたがふと時計を見るとさほど時は過ぎていなかった。女子はカメラにその姿を撮られバラせば校内に写真をばらまくと脅され泣きながら部屋を出ていった。宮田以上に時がすぎるのが長く感じたに違いない。

「宮田よくやったよ。あの女俺がいくらいつてもお高くとまりやがって。清々したぜ。さー名前書きな。おまえも共犯だぜ。」

八木はニヤツと笑い部屋を出た。

これが男子美化サークルなのだ。宮田は悟った。震えた。八木への怒りが込み上げた。しかしもうなにかも遅い。宮田はそれ以後このサークルに出向く事はなかった。

宮田がサークルに出向かわなくなった後もあのような行為は続けられとある女子の勇気ある通報により事件が明るみになったというわけだ。

そして今宮田はここにいる。事件関係者として、あの貼り紙に名前を刻まれた英雄が。

第2話 最後まで

「はい。間違いありません。私を、、男子美化サークルのメンバーです。」

「それは間違いありませんね？」

薄暗い三乗程の部屋、ここは警察の調査室だ。

この部屋は不便極まりない。夏には暑く、冬には寒い。エアコンなんて便利な物はない。

この部屋で調査する担当刑事は服部。もう長いことこの部屋で仕事をしているので彼の体はこの部屋に適した体質に変化し、春・夏・秋・冬とこの部屋に居て暑いと感じる事も寒いと感じる事もなかった。

だが目の前に座る女の子は違った。春と夏の季節の境目の今、換気扇だけがクルクルと回るこの部屋のいこちの悪さに気分まで悪くなりそうだった。

正確に言えばこの部屋に居る事だけが気分を害する理由ではないのだが、、。

平成18年5月27日

ちらちらこちらを伺う目線に気付いたのはついさっき。一体いつから見ていたのだろう。あれは一年生の宮田吉哉だ。最近かつこ良くなり二年生の間でも噂の彼だ。

一体なんの用だろう。いや私を見ているわけではないのかも知れない。コーヒーをすすりながらそんな事を考えていた。

「中本さん？」

きたー！やっぱりあたしだ！あたしを見てたんだ！！

「はい？何か？」

宮田吉哉があたしに声かけてる。緊張するな。

「あっその、隣いいかな？」

昼さがりのカフェは人も増え始めガヤガヤと騒がしくなっている。

「もつお昼おわたの？」

「ええ、授業が早くおわたたもので。」

一体なんなんだろう。最近よく声かけられるな。三年の誰だっけ？

その人はなんか遊んでそうで嫌だったけど宮田吉哉ならいいかも。

「先輩かわいいよね？彼氏いるの？」

「えっ？いないよ！宮田君こそいるでしょ？」

「あっ先輩俺の事知ってるんだ？ねえ先輩フリーな者同士いいことしない？」

あたしは宮田吉哉の少年のようなその瞳に吸い込まれるように恋に落ちた。

ガヤガヤ騒がしいカフェを二人手をつなぎ後にした。一体あたしどうなっちゃうんだろう。でも宮田吉哉とならどうなったっていい。

そんな気持ちが生まれていた。

しばらく二人無言のまま歩いた。一角にある部屋に連れていかれそこで私たちは甘いキスを交わした。

とたんに数人の男にはがいじめにあい私は、、

レイプされた。

無我夢中で走った。家に着き鍵を締めまずシャワーを浴び大声で泣いた。

地方から上京して二年。まさか自分の身にこんな事が起ころうとは。

これから先どうすればよいのか、。
数か月後あたしは警察に行く決心をする。
あたしのような犠牲者を今後出してはいけない。
大学を辞めざるを得ない状況になるかも知れない。だけど私は戦う
と決心したんだ。私のために。」

「そこに誰が居たかわかりますか？」

薄暗いごごちの悪いその部屋である時の事を思い出しそうになる。
「誰が居たかはよくわかりません。ただ男子美化サークルのメンバ
ーだった事は確かです。」

服部は頭を抱える。なぜサークルのメンバーだとわかるのに名前は
分からないのか、どういった経緯でサークルの部屋に行き着いたの
か。

こりゃ長くなりそうだ。そう思いまた頭を抱えた。
ふと窓に目をやると木から落ちた若葉が雨にぬれびったりと張りつ
いていた。

そして梅雨入りした事に気付いたのだった。

数日後

主犯格として八木が逮捕。新聞やニュースでだいたいと今取り上げ
られている。大学内にも報道陣が後を断たない状況である。
しかし新聞には八木の名前が乗る事があっても宮田吉哉の名前が乗
る事はなかった。

最後まで中本はその名前を出さなかった。

最後まで宮田は風邪で休んだとうそを通した。
最後まで八木は自分は関係ないと言い通した。しかし調査が進に連
れ余罪についても明らかとなり現在裁判中である。

「それでは取り調べを始めます。」

またこの部屋に服部の獲物がやってくる、。

第3話 たま

「おばちゃんこれで何回目！？もう警察行くしかないね！！いい！？」

数時間後調査室には服部と一人のおばさん田畑たまの姿があった。

「どうしてここに居るかわかる？」
服部は優しく問い掛ける。調書には窃盗歴三年と書かれている。以前にも窃盗で捕まった事があるのだ。報告のあったスーパー以外にも。

平成16年8月5日

それは暑い暑い日だった。いつものように電車に乗り一駅先のスーパーまでお買物。うなるような天気の中歩く事5分スーパーに着いた。スーパーに入るとクーラーが効いており急激に体が冷えた。田畑たまはカゴを手にし、夕飯は何にしようか店内を見回した。ふと精肉コーナーで挽肉を見ていると今朝の家でのやりとりを思い出した。

「母さん今日は遅くなるから晩飯いいよ。」
と、息子。

「お母さん私今日仕事のあとミーティングあるんで遅くなりますから先夕飯済ませてください。」
と、嫁。

「ばーちゃん俺塾あるから夕飯いらないよ。」

と、孫。

思えばこんな暑い思いしてあたしは誰のために夕飯を作るのだろうか？
あたし一人ならおしんことおみおついで十分じゃないか、。

いつのまにか挽肉はカバンに入っていた。
パンとみそを買いスーパーを出たところで店員に呼び止められた。

初めての犯罪。

息子は迎えにはきてくれず代わりに孫が来た。

「、、、帰りましょう。」

二度目は嫁が。

そしてそのスーパーへの出入りを禁止された。

数度目の今回警察へ赴く事になるがやはり息子は迎えには来てくれない。

この部屋は寒い。

ふと顔をあげると見覚えのある優しい顔がこちらをみて微笑んでい
る。

あああなたやつと迎えに来てくれたんですね。

たまはそのまま帰らぬ人となった。

しかし息子が迎えにくることはなかった。なぜなら息子はたまの夫
と共に交通事故で既にこの世にはいないのだ。

さて次はどんな人がこの部屋を訪れるのか、服部はタバコをふかし
待っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0872b/>

調査室

2010年12月17日18時57分発行